東北大学大学院国際文化研究科

GLOBE

GSICS
TOHOKU UNIVERSITY

国際文化研究科　広報
PUBLIC INFORMATION MAGAZINE

No. 27

Octorber 2014

http://www.intcul.tohoku.ac.jp

TOHOKU UNIVERSITY

CONTENTS

02 国際文化の新しいスタート
黒田　卓 研究科長

04 3系及び8講座の紹介

07 前期課程・後期課程修了者からのメッセージ
阿部　真衣
陳　熙
孫　恵仁
山口　梓
ライアン・スプリング

10 研究紹介
吉田　栄人 准教授
大河原 知樹 准教授
深澤 百合子 教授

13 平成 26 年度 科学研究費補助金採択一覧

最近の著作から
山下　博司 教授
小野　尚之 教授

INFORMATION
国際文化基礎講座（公開講座 2013）
国際文化学会活動紹介 2014
オープンキャンパス 2014 報告
耐震改修後の研究科棟の様子

研究科入試情報

国際文化研究科の新しいスタート

国際文化研究科長　黒田　卓

国際文化研究科は、平成５（1993）年に国際地域文化論専攻・国際文化交流論専攻の２つの専攻によって構成される独立研究科として発足し、平成13（2001）年には国際文化言語論専攻が増設され３専攻の体制となり現在にいたっております。創設以来20年の間に、本研究科は世界の地域文化、国際的文化交流および言語文化に関する学際的かつ総合的な教育研究を行い、高度な研究能力および専門知識を備え国際舞台で活躍する人材を養成することを教育目標に掲げ、特色ある教育プログラムにより他に類例をみない修士（国際文化）、博士（国際文化）という学位を授与し、多方面で活躍する有為な修了生を世に輩出してまいりました。平成25年９月修了までで、通算で修士号を725名、博士号を165名に授与するという実績を重ねてきました。

しかしこの20年という歳月の経過のなかで、急速なグローバリゼイションをはじめ社会の目まぐるしい変化が、研究科を取り巻く環境に正負合わせた影響を及ぼしてきたことも否めない事実です。ますます緊密に結ばれたこのグローブにおいて、従前の学問分野では対応しきれない、つまり学際的･総合的アプローチを不可避とするような諸問題が浮上し、刻々とその解決が求められている、そのことはわれわれの研究科の先見性や意義をクローズアップしているものと言えます。他方で、留学生の急増、リカレント教育ニーズの高まりに見られる人材育成の多様化や、国際的な舞台を前提とし、グローバルに思考し行動する人材が以前にも増して要請されるようになってきたこと、また国際文化研究をめぐる学問状況がより国家から個人やグループに対象をシフトしてきていること、こうした20年前には十分想定されていなかった社会情勢や学問状況の変化も無視できないものがあります。

このような状況変化に応えるべく、国際文化研究科は、東北大学グローバルビジョン（平成26年５月公表）で示される東北大学全体の教育改革・組織機能強化と歩調を合わせ、平成27年度から国際文化研究を核にして、より学際的な連携・協働を可能とする国際文化研究専攻という１専攻体制の下、専門性によって統合された教育プログラムたる３つの系、そしてより大きな括りでまとめられた８講座によって構成される組織体制へと移行します。また、入学定員・収容定員数も近年の入学者数動向を勘案して、新体制に相応しい規模に適正化を図ります。系、講座および講座に配置予定の教員数については表１に、入学定員・収容定員数の変化については表２に図示したようになります。

表１　専攻・系・講座の構成

専攻	系	講座名	教員数
国際文化研究専攻	地域文化研究系	ヨーロッパ・アメリカ研究講座	8
		アジア・アフリカ研究講座	4
		国際日本研究講座	6
	グローバル共生社会研究系	国際政治経済論講座	4
		国際環境資源政策論講座	5
		多文化共生論講座	7
	言語総合研究系	言語科学研究講座	8
		応用言語研究講座	8
			50

表２　入学定員・収容定員の適正化

現行

区　　分	博士前期課程	博士後期課程
国際地域文化論専攻	15	11
国際文化交流論専攻	20	16
国際文化言語論専攻	13	11
入学定員	48	38
収容定員	96	114

改組後

区　　分	博士前期課程	博士後期課程
国際文化研究専攻	35	16
入学定員	35	16
収容定員	70	48

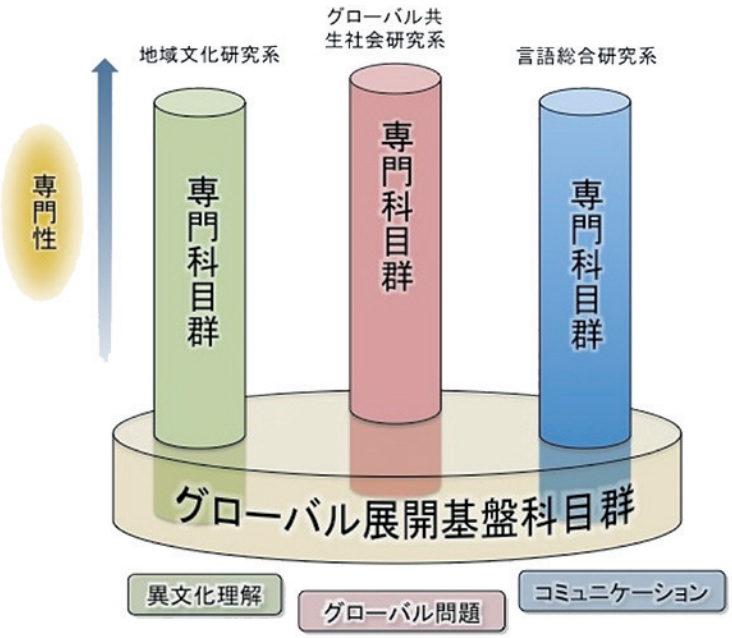
次に今回の再編計画によって、本研究科がどのように生まれ変わっていくのかを概括的に述べてみたいと思います。第一に、研究科の設立理念を基本的に継承しつつも人材育成目標をより鮮明にすることです。グローバルに思考し活躍できる人材の養成を主たる目標として掲げながら、より具体的には、１）自文化を含む異文化への深い理解力、２）グローバルな諸問題に関わる解決能力と指導力、３）高度なコミュニケーション能力、を学生が修得すべき能力の基本目標とします。こうした能力を身につけ、さらに専門的テーマに即して専門能力を練磨する道筋を保証すべく、「地域文化研究系」、「グローバル共生社会研究系」、「言語総合研究系」という３つの教育プログラムを編成することにしております。

第二に、そうした目標に向けて新たなカリキュラムの構築を行います（図１を参照ください）。前期２年の課程において、横軸として、「研究のための倫理」、「研究のための日本語スキル」、「研究のための英語スキル」、「異文化理解基礎論」、「国際政治論」、「言語科学概論（英語）」といった「グローバル展開基盤科目」群を配置し、これらから選択で少なくとも５科目を履修することで、前述の修得すべき能力の涵養を図っていきます。同時に、縦軸においては、より改良した学位授与促進プログラムを基軸に、よりきめ細かい研究（論文）指導を展開し、専門性の向上を図り、博士学位の着実な取得に繋げていきたいと考えています。

第三に、教育プログラムである系についてはすでに説明をしましたが、新しく立ち上げた講座も含め、講座の中味も斬新なものへと変えていきたいと考えています。とりわけ、国際日本研究講座は、研究科の強みである学際性を活かし、「世界の中の日本」という観点から比較の手法も駆使した総合的な日本研究を推進します。また、国際政治経済論講座は、従来研究科に不足していた国際関係、国際政治の学問分野を補強し国際経済研究分野と一体化したもので、ますます一体化の度合いを深める国際政治経済を総合的に取り扱うユニークなものであります。これら２つの講座をはじめ改編した８つの講座は、今まで以上に密に連携しつつ学生の多様な研究ニーズに応えられるものになると確信しております。

面目を一新した国際文化研究科が、学内外の期待や要請に的確に応えられるよう、教育研究のさらなる充実に努める所存ですので、皆さまの一層のご支援・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

図１　新しい教育カリキュラムのイメージ



３系及び８講座の紹介

地域文化研究系

地域文化研究系は、総合的かつ学際的な観点から、「世界の中の日本」も視野に入れつつ、世界各地域の文化と社会の固有性および多様性を解明することを目的として教育研究を行います。これにより、広い視野と地域文化に関する高度な知識を身につけ、国際社会における相互理解と協調に資する専門家・教育者・研究者を育成します。

ボーダレス化の進展する国際社会においては、それぞれの文化が深化する一方で拡散・越境するという重層的社会現象が顕著にみられます。具体的にそのような現象を理解するために、個別の地域文化研究においては、歴史・思想・文学等の学問領域を越境した複合的研究方法により地域の固有性を考究します。その上で、地域間の比較研究や複数地域を対象とする包括的研究を行います。その際、人文科学の諸領域の枠を超えて、比較の手法も駆使した研究方法により、錯綜した人間の営みのダイナミズムを総合的に解明することを目指します。

ヨーロッパ・アメリカ研究講座

本講座はこれまでのヨーロッパ文化論講座とアメリカ研究講座を発展的に統合して誕生する講座です。さらに発足に際して、これらの地域を研究対象としながらも上記の講座以外に属していた教員が加わったことでより幅広い教育・研究体制が整いました。具体的には、フランス・ドイツ・アメリカの文学、イギリスの演劇、フランス・アメリカの歴史学、ラテンアメリカの文化人類学を専門とする８名の教員で本講座はスタートします。

ヨーロッパ･アメリカは歴史上、さまざまな民族･人種･言語が錯綜した地域であり、20世紀には世界を牽引した地域でもあります。グローバル化の進む21世紀に生きる私たちはこうした複雑な歴史を有する地域に対して相対的評価を下すべき時代に生きています。

こうしたことから、本講座はヨーロッパ地域研究分野とアメリカ地域研究分野を分け、それぞれの分野において個別具体的な専門研究にもとづいた教育を行い、各地域の文化・社会の固有性と多様性を解明します。さらには、研究分野間の連携を密にすることにより、ヨーロッパ・アメリカ文化の総体的把握を目指します。

以上のきめこまやかな教育体制のもとに、これからのグローバル時代を生き抜くに不可欠な専門知識と幅広い視野を兼ね備えた人材の育成をはかることが本講座の教育目標です。

アジア・アフリカ研究講座

アジア・アフリカ研究講座は、主に２つの地域の今日的な実態を解明する目的で設立されました。１つは、東南アジアから北アフリカまでの非常に広い範囲にわたって分布するイスラーム地域です。イスラーム地域は、近代に至るまでアジア・アフリカ地域の紐帯を維持する役割を果たした反面、摩擦を引き起こす原因ともなってきました。イスラーム地域の特性の実証的な研究が今こそ求められています。第２には、いまや超大国となった中国という国家です。世界の政治経済を牽引する中国の発展の基層は、逆接的なようですが、むしろ歴史、文化にこそ求められるのではないでしょうか。このような観点から、21世紀のアジア・アフリカ地域における中国のプレゼンスについて考究することが重要だと考えます。

本講座に所属する学生は、変革期のアジア・アフリカを、イスラーム地域あるいは中国の歴史と文化に着目しつつ、必要に応じて国連の公用語であるアラビア語、中国語、あるいは他の言語等を習得し、個別的、横断的、独創的な研究を推進して学位論文を作成し、最終的には国際的に活躍できる高度な専門職業人、教員、あるいは研究者となることが期待されます。そのために、本講座には西アジア、北アフリカおよび中国を専門に研究するスタッフが配置され、学生が必要な学術スキルをじっくりと修得する指導体制をとっています。

国際日本研究講座

国際日本研究講座は、文学、比較文化論、思想史学、考古学等の多様な専門分野の教員を擁しています。平成26年度までの国際文化研究科の旧組織において、アジア文化論講座、比較文化論講座、科学技術交流論講座、言語文化交流論講座、多言文化論講座という５つの講座に所属していた日本研究に携わる教員が新たに集結し、当講座をスタートさせることになりました。

グローバル化が進展する現代にあって、日本研究にも質的な変容が見られます。従来の日本研究においては、世界との連関が薄い日本独自の文化の研究、および日本における諸外国文化の受容・影響に関する研究が主流でした。しかし、昨今はマンガやアニメに典型的に見られるように、日本から発信される文化が世界各地に浸透しつつあります。そこで、当講座では、「日本の中の世界」のみならず、「世界の中の日本」という視座から、歴史的な考察もふまえた複合的な日本研究を推進します。

研究の対象とする時代が幅広く、古代から近・現代にわたっていることも、当講座の特色の一つです。当講座で学ぶ学生は、たとえば文化交流の一側面について通時的に考究することもできますし、また、ある時代の社会現象を取り上げて諸外国との関係を探究することもできます。

国際日本研究講座は、日本と諸外国の関係に強い関心を持ち、日本と世界に関する広い視野と深い学識を身につけたいと思っている人たちに、学術的な研鑽と交流の場を提供します。

グローバル共生社会研究系

グローバル化が急速に進む現代社会においては、国家の枠組みや国境線などに囚われがちだった既存の教育・研究のあり方に軌道修正が求められています。とりわけ、安全保障をはじめとする国際関係、国際経済、資源と環境の保全、民族・文化の摩擦、差別と人権などを巡る地球規模の諸問題では、その解決に向けて新たな知のアプローチが要請されています。このような要請に応えるためには、従来の学問分野の伝統を活かしつつ、それらを統合することによって、新たな学問フロンティアの開拓を目指さねばなりません。グローバル共生社会研究系では、そのような時流の最先端で新たな知を構築し、地球規模の諸課題の解決・改善の方法を探求します。また、異文化間の共生や人間と環境の共生を視野に収め、複眼的な思考に立つ知性を涵養する教育の提供によって、現代国際社会に対する深い識見を備え、日本国内外において国際社会に貢献しうる人材の育成に当たります。

国際政治経済論講座

現代国際社会においては「国際政治」と「国際経済」が一層分かちがたく、密接に関わり合うようになってきました。このような目まぐるしい変化の本質は従来の政治学・経済学の枠組みを越えて複合的な視野に立ってはじめて理解することが可能です。国際政治経済論講座ではそうした複眼的な思考に立ちながら先端的で新たな知を構築し、グローバル化のなかの日本とアジア、日本とアメリカ、アジアとアメリカ等の政治経済関係にフォーカスを絞り、世界をリードする教育研究の遂行を目指します。

国際政治経済論講座は、国際市場における諸産業の競争、貿易、金融・投資、地域経済統合、世界経済体制など、これまで国際的な経済関係の分析を行なってきた講座に、安全保障、地域紛争、ナショナリズムなど日本を取り巻く国際環境での国際政治関係を扱う新規科目を設け、政治・経済両面の密接な国際的関わり合いを解き明かすための教育・教育研究を行なう講座として編成されました。本講座では政治学、国際関係論、経済学等の社会科学の知識を応用し、国際的な政治と経済の現象を洞察する力を培う教育プログラムを提供し、現代国際社会の複雑で多様な現実問題を解き明かすための広範な知識と独創的な分析能力を備えた人材の育成に努めます。

国際環境資源政策論講座

資源枯渇や環境保全など、現代では、地球環境問題の解決が強く求められています。国際環境資源政策論講座では、それぞれ専門の異なる教員５名（教授１名、准教授４名（協力教員２名））という体制の下で、地球環境問題の解決に資する知識の創出と人材の育成に当たっていきます。また、当講座の特色としては、以下の３点が挙げられます。

第一の特色としては、「実務主義」が挙げられます。アプローチは様々ですが、当講座の最終目標は、現実問題の解決にあります。そのため、公共政策や社会的厚生に対する造詣を深めつつ、現場重視の姿勢で研究・教育活動に当たっていきます。

第二の特色としては、「総合科学的アプローチ重視」が挙げられます。環境問題は複雑な構造であることが少なくなく、同じ問題であっても、文化や経済状況によって構造が異なることがあります。そのため、環境工学、社会工学、経済学、環境心理学、統計学等の知識を駆使し、問題を多面的に検討する総合科学アプローチが必要になります。これも当講座の特色と言えます。

第三の特色には、「国際的視野の重視」が挙げられます。地球規模で生じている環境問題の多くは、グローバリゼーションによって有機的につながっています。そのため、外国の状況（特にアジア諸国）を理解し、国際的視野から改善策を検討することが必要になります。この点も当講座の特色と言えます。

当講座では、各教員の専門分野と３つの特色を活かし、アジアにおける環境資源政策研究の拠点の一つとなることを目指していきます。

多文化共生論講座

グローバル化が進んでいる現代社会においては、人や物の国際的な移動が活発化し、多様な文化の接触の機会が増加しています。現在、日々の生活の上で、異なる文化に関する話題のない日はないでしょう。このような状況下で、文化的背景を異にする人々の接触による民族的・文化的摩擦などのグローバル・イシューもしばしば生じていますが、これらの問題を解決し、様々な民族的・文化的背景を持つ人々の共生する社会を構築することは、国際的にも国内的にも避けて通ることのできない課題です。多文化共生論講座では、諸文化・諸民族に関する学際的研究や比較研究を通じて、複数の民族や文化の共生が可能となる社会の実現を目指して、そのための教育･研究を行います。

講座には、専門の異なる７名の教員が所属しています。各教員の方法論は、それぞれ哲学・文学・歴史学など多様であり、事例として取り上げられる地域もアジア・ヨーロッパと広いものですが、常に「複数性」「共生」が共通のキー・ワードとなります。専門科目としては、各教員が担当する「多元文化構造論」「多元文化動態論」「多文化共生思想論」「多文化交流史」「多元言語文化論」「多文化比較思想論」「多民族社会論」と多様な科目が用意されています。それに加えて系共通科目や多文化共生論総合演習を通じて、学生は複数民族や文化の共生社会実現という目標に近づくために幅広い観点から学び、研究を行うことができます。

言語総合研究系

それぞれが分かりやすい名称の２つの講座で構成される言語総合研究系は、ボーダレスでグローバルな性格をますます強める現代の国際社会の中で、英語をはじめ多くの言葉が果たす役割を、先端的な言語研究の立場と、研究成果の特に言語教育への応用の立場から追究するためのリサーチフィールドです。理論言語学･応用言語学、というような２分法的な考え方ではなく、２つの講座に所属する学生も教員も、系という場で活発に交流し、歪狭な学問的世界に閉じこもるのではなく、これまでになかった広い視点と、それを裏付ける多様な研究分野についての確固たる知見を共有していくことが、言語総合研究系の最大の目標です。

英語での授業の数を増やし、多様な母語・文化背景を持った各国からの留学生と日本人学生の間での魅力的で活力ある共修の場が、言語総合研究系からも提供されます。

また、言語を多面的に扱うこの系の役割として、各国の研究機関と連携しての世界水準の言語研究成果の発信と、東北大学をはじめとする国内外の高等教育機関における言語教育に対する積極的な貢献があげられます。

言語科学研究講座

本講座は、意味論･語彙論･語用論･統語論などの言語学諸分野を認知言語学や生成言語学などの視点から専門的に研究するバラエティーに富んだスタッフを擁しています。日本語や英語のみならず世界の多様な言語の比較研究を行い、様々な言語の間に存在する共通性と相違点を詳らかにし、自然言語の特質及びその獲得、学習、理解、使用の根底にある人間の認知能力や言語機能の解明を目指し研究に取り組んでいます。応用言語研究講座との密接な連携により、理論研究から得られた成果を言語獲得や言語教育の研究に応用し、幅広い視野に立った教育プログラムを提供します。

言語科学研究講座は、旧組織の言語コミュニケーション論、言語文化交流論、言語科学基礎論の３つの講座に所属していたスタッフで構成されています。これまでそれぞれの講座で個別に行われてきた研究教育プログラムを統合し、より幅広い視座を持つ人材を育成します。

また、平成14年から19年まで行われた東北大学21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」において培われた知を継承し、言語学の研究成果を心理学的、脳神経科学的な手法で実証的に検証する研究も射程に入れ、学際的な研究教育プログラムを構築します。

世界の様々な言語の間に存在する類似や差異の発見・分析に興味を持ち、その根底にある文法や認知能力の解明に一緒に取り組んでくれる、知的好奇心に溢れた人材の志願を期待します。

応用言語研究講座

応用言語研究講座では、関連する諸科学・技術を応用して言語研究を進め、そして、その研究成果を言語教育に応用しています。応用言語研究講座という講座名が示すとおり、「応用」が研究のキーワードになっています。また、研究の入口部分でも、研究の出口部分でも、外の領域に向かって開かれています。

各教員の研究内容はつぎのとおりです：①コンピュータ言語学および認知科学の方法を取り入れた文法研究と日本語教育、②コーパス研究とそれを応用した英語教育、③言語教育学研究を基礎にしたスペイン語教育および言語教師教育、④ICTを応用したドイツ語教育の開発・実践・研究、⑤高等教育研究（教授法、評価、質保証、職能開発）、⑥第二言語習得研究とバイリンガル教育、⑦機能主義的・認知主義的な言語理論を基礎にした統語論、意味論にかんする対照言語学的・言語類型論的研究、⑧第二言語としての日本語の習得研究と日本語教育。

当講座の教員は、全員、東北大学で言語教育を担当しています。担当語種は、日本語、英語、ドイツ語、スペイン語です。教員は、研究を教育に応用し、教育から研究へフィードバックさせています。当講座では、教育と研究とを密接に連携させながら、応用言語研究の新しい地平を拓いていきます。

修士課程・博士課程修了者からのメッセージ

国際文化交流論専攻
言語文化交流論講座
平成 26 年３月
博士前期課程修了
阿部　真衣

経験を通して

私は 2014 年３月に博士前期課程を修了し、同年５月から念願の日本語教師として働けることになりました。「修了後は海外で日本語教師になる」という目標を持ち入学したのは今から３年前になります。その頃よりも一層強い志を持って新たなスタート地点に立つことができたのは、博士前期課程での充実した３年間があったからだと思います。

３年の間には様々な経験をしましたが、やはり研究を通して得たことが一番大きく、この経験が私を成長させてくれたように思います。修士論文では、日本語の終助詞「よ」或いは「ね」が命令・禁止・依頼・勧誘表現と共起するケースについて考察を試みました。研究過程では、納得のいく結論が出せるのかと不安に思ったこともありましたが、先生に面談をしていただいたり、ゼミの際に講座の先生方や院生の皆さんからアドバイスをいただいたりしたことで、研究を進めていくことができました。研究過程で一番大変だったのは、修士論文の執筆作業です。結論にたどり着いたものの、自分の主張を上手く文章にまとめることができず、何度も何度も書き直しました。ナーバスになり、つらい時期でもありましたが、このような大変な思いをしたからこそ、「合格」をいただいたときは喜びもひとしおでした。研究テーマを見つけることに始まり、その結論を模索し、論文としてまとめ上げるという一連の作業を通して、専門分野の知識や論文作成のスキルのみならず、自信も得ることができたと思います。

研究と並んで貴重な経験だったのが、ニュージーランドの大学で日本語教育実習をしたことです。所属していた講座の先生のご紹介で、教育実習生（チューター）として８ヶ月間、大学で日本語教育に携わる機会をいただきました。教育実習では１年生から３年生までの全てのコースのチュートリアルの授業を担当し、主に会話練習の指導を行いました。会話練習の授業で文法の説明をすることはありませんでしたが、学生から説明を求められることが何度かありました。多くの場合、例文を提示することで学生の理解に繋がりましたが、即座に答えられないような質問もありました。このような時は考えられる例文を探したり、どのような文脈で使用されるかを考えたりしながら、まずは自分自身が理解を深めるようにしました。この経験を通して、日本語を教えることと日本語を研究することが繋がっていると実感しました。

これら２つの経験以外にもゼミの時間や講座の恒例行事など、どれも深く印象に残っています。入学時に思い描いていた以上のことを学び、経験することができたのは、講座の先生方ならびに院生の皆さんのご指導、ご支援があってのことです。また、職員の皆様にも大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

国際地域文化論専攻
アジア文化論講座
平成 26 年３月
博士前期課程修了
陳　　熙

始めの一歩を踏み出そう

今から三年前、留学の生活を思い描き、期待に胸を膨らませながら仙台に来ました。時の流れは早いものです。今、私は博士前期課程を修了し、博士後期課程に進学しました。博士の学位に挑戦するために、仙台の緑に癒されながら充実した日々を送っています。

日本語学部出身なので、日常コミュニケーションには大きな苦労はしませんでした。しかし、日本語で論文を書いた経験がない私は、論文の構造とか、専門用語とか、そういう基本的なことさえよく分かりませんでした。先行研究を読んでも、研究者によって、テーマ、方法が大きく異なるので、悩みに悩んで、研究に手がつかなくなりました。その時、基本的なことから始めようと思い、日本語文章の書き方に関する本を勉強しながら新聞を書き写す練習をしました。それによって、理論的に考える力や文章の構成力を少しずつ身に着けることができました。

私の研究対象は近代という激動の時代を生きた中国人インテリたちです。彼らは中国の近代化を背負いながら「西洋」に向きあう知的人生を送りました。彼らがどのような精神構造を有し、如何なる未来を描いたかに興味を持ち、そのあたりを中心に修士論文のための研究を進めました。限られた時間の中で、修士論文を完成させるのは簡単なことではありませんでしたが、「始めの一歩を踏み出す」ということが何より大切と思います。始めの一歩は、それほど大きくなくても、それほど上出来でなくても、必ずしも十分に計画されたものでなくてもいい。そのように考え、とりあえずできることから取り組み始めました。そうすると、その後は、書けば書くほどスムーズになり、やる気もどんどん高まっていった、というのが、今回実際に私が経験したことです。また、指導教員の先生から、「論文の締め切りが実際の日付より一か月前であると想定しよう。そして、暫く放置した後、自分の論文を改めて読むと問題点が浮き彫りになる」という貴重なご意見をいただきました。残念ながら、私はぎりぎりまで論文を完成できませんでしたが、後輩の皆さんはぜひこの方法でやってみてください。

今、前期課程を修了して振り返って見ると、研究にとって大切に思うことは「常に知的好奇心を持ち続ける」ということです。好奇心は未知なる知的世界にチャレンジする原動力であり、好奇心を抱いて探求することによって学問の分野だけでなく、新しい生活の楽しみをも見い出せます。各国からの留学生が多く、多彩な異文化交流を楽しめる国際文化研究科はまさに、好奇心をかきたてる場所です。私が在籍したアジア文化論講座の院生たちは歴史、文学、映画など、様々なテーマの研究をしていますので、学際的な相互交流により刺激され、いつも未知の世界の中に迷い込んだような雰囲気を感じられます。これからも国際文化研究科で、今までの経験を生かして研究の道を邁進していきたいと思います。

国際地域文化論専攻
比較文化論講座
平成 26 年 3 月
博士後期課程修了
孫　　恵仁

大学院を生き抜く力

韓国の大学で英文学を専攻していた学部時代に、先生が一冊の本を貸してくださいました。ラフカディオ・ハーンの『骨董』です。怪奇物語を好む私の傾向をその先生がご存知だったのです。しかし、まさか、その一冊の本が私の人生を大きく変えることになるとは思いもしませんでした。その時のハーンとの出会いが、後に私を日本へ、さらにはハーンの研究を通じた博士の学位まで導いたのです。この素晴らしい出会いを準備してくださった先生はかつて東北大学に留学しておられました。その先生が東北大学への道を私に示してくださったのです。ふり返ってみると、来日してから博士後期課程を修了するまで、とても長い道のりでした。この長い道のりの中で経験したことを生活と研究の二つの側面において、みなさんにお話したいと思います。

先ず、私が仙台での生活を通して得たものは、何より、多くの異文化に接する機会です。東北大学には多くの留学生がいます。日本人の学生はもちろん、私は、留学生たちとの交流を通して、それまで接したことのない文化と触れ合うことができました。そして、その経験により、異文化を「理解する」ことが易しくないこと、そして、自分が先入観や偏見から自由ではなかったことに気づかされました。それは実際に体験しなければ、頭ではわかっていても実感できない問題だと思います。社会に出てから、これほど多くの文化の人々と接する機会はきっと多くないでしょう。みなさんも大学院に属している間に、研究だけでなく、さまざまな文化からの人々と交流する機会を積極的に作ってみてはいかがでしょうか。

次は研究の面に関するお話です。ラフカディオ・ハーンの研究を始めた頃、分からないことばかりの、いわば「ひよこ」でした。毎日新しい発見があり、研究は大変でありながら楽しいものだと思いました。しかし、研究を重ねていけばいくほど、楽しさは少なくなり、苦労は倍増して行きます。その苦しさのあまり、あきらめたいと考えたこともあります。大学院生であれば、誰もが一度は感じたことがある感情ではないでしょうか。そういう時に私を救ってくれたのは、研究の仲間でした。研究の苦しさは、研究の仲間だけが分かってくれます。そして、お互いに励まし合い、刺激し合うことによって、自分を立て直すことができます。実際に異なる分野の研究室の院生が集まり、定期的に研究会を開くことにより、様々な分野の研究仲間との交流ができました。自分と異なる研究分野に接することができたため、新鮮な刺激ともなりました。重要なのは「孤立しないこと」です。皆わかっていながらも、追い詰められた時にはなかなか実行できないのも事実です。みなさんもどうか苦しみの中でもできる限り研究の楽しみを味わいながら、多くの成果をあげられることをお祈りしています。

国際文化言語論専攻
言語応用論講座
平成 26 年 3 月
博士後期課程修了
（現：専門研究員）
山口　　梓

博士課程修了にあたって

私は平成 21 年から 5 年間、国際文化研究科言語応用論講座に在籍し、平成 26 年 3 月に博士の学位を授与されました。今振り返ってみますと、この 5 年間は私にとって大変貴重で濃密な歳月でした。最初の頃は、博士論文執筆という大きな最終目標を前にして、本当に成し遂げることができるのか、不安やプレッシャーで押しつぶされそうになったこともありました。また、文献やテクストを読むことで精一杯で、論文の構成を思い描くことができず、研究がなかなか進まなかったこともありました。研究が停滞した時、力を与えてくれたのは総合演習でした。総合演習で発表したり、学会発表に挑戦したりすることで、研究を進めるうえでの良い刺激、原動力をいただき、なんとか博士論文を完成させることができました。

博士論文のタイトルは『ジョージ・オーウェル研究－「動物」表象と「感覚」描写を中心に－』です。博士論文では、ジョージ・オーウェルの作品に頻繁にあらわれる犬、水牛、豹、豚、驢馬などの動物の比喩表現と味覚、嗅覚、視覚などの感覚描写に着目し、動物の比喩表現と感覚描写の多義的な機能を分析することによって、彼の豊穣な文学世界構築を可能にした文学手法を解明しました。小説を毎日精読していくうちに、ジョージ・オーウェルと日々対話をしているような気になりました。オーウェル文学の研究を通して、オーウェル作品に登場する魅力的な人々と出会い、彼らから生きる上での叡智や鋭い洞察を貰ったと感じます。

総合演習内外での先生方との議論や助言そして院生の方々との語らいを通して、自分では思ってもみなかった視点に気づかされ、おかげで研究の幅を広げ、研究テーマを深めることができました。

一見すると無関係に見えるような日常の他愛もない雑談が、アイデアやヒントになりました。この５年間の研究を通して、多くの人々と出会い、さまざまな考えに触れることができ、精神的にも大きく成長することができました。自分の力は小さくても、さまざまな人とのつながりを通して、自分の持っている力以上のことを成し遂げることができるのだと実感しました。

現在、国際文化研究科の専門研究員を務めながら、高校で英語の非常勤講師を務めております。時として授業運営や生徒指導などに迷いや不安を感じることがありますが、国際文化研究科で学んだことを忘れずに、邁進していきたいと考えております。最後になりますが、言語応用論講座の先生方や院生の皆様、事務の方々、家族、友人に、あらゆる面で支えていただいたことに、深く感謝申し上げたいと思います。

国際文化交流論専攻
言語コミュニケーション論講座
平成 26 年３月
博士後期課程修了
ライアン・
スプリング

努力で道を切り開く

人生は自分で作るものだと思います。大学・大学院として、自分がやるべきことを自分で精一杯頑張ることです。とは言え、他人からの手伝いが全く不要という訳ではありません。したがって、大学院生の役割はその学生のやる気を活かせるような環境を作り、頑張っている学生に対して適切な指導や支援を行うことであると思います。その意味において、僕は、博士課程の前期課程と後期課程の両方を、東北大学大学院国際文化研究科で学ぶことができたことをすごく良かったと思います。

大学院に入学する前は言語学の知識が十分ではありませんでした。不安ばっかりで研究の方針もどうすればいいのか分かりませんでした。しかし、博士の学位を取ることがずっと前からの目標であったため、勉強に励みました。そして、東北大学の優れた施設と優秀な教員の指導のお蔭で十分な言語学の知識を会得でき、いくつもの実験を行い、数多くの学会で発表し、学術誌への論文掲載などの実績を収めました。僕の研究テーマは認知言語学と第二言語習得に関するものであり、実際に日本での英語教育につながるように励んできました。実用的な目標と研究の成果が認められ、国際文化研究科の事務職員のアドバイスに従い、学術振興会の支援金に申込みました。その結果、研究資金の援助を頂けるようになりました。このように、学術的な面でも生活の面でも東北大学国際文化研究科に支援して頂き、自身のやる気を活かせ、様々な成功にもつながり、良い業績を収めることができました。

また、東北大学で勉強・研究ができたため、多くの貴重な体験もできました。仙台という町で暮らし、色々なことが経験できました。東北大学・仙台では国際的な出会いが多くあり、自分の研究を進め、多くの知識を得ることができました。このような出会いから国内外で実験を行ったり、研究発表することもできました。また、仙台は大きい町でありながら、人々との絆が強くて、コミュニティー観が高いと思います。そのため、博士課程の後期課程に入学する直前、2011 年３月に東日本大震災にあった時は回りの人との助け合いにより、何とか乗り越えることができました。まだ完全に立ち直っていない人もいますが、これからも東北の人と共に頑張り続けることがこれからの自分にとって、大切なことであり、大きな経験になると思います。最後に、東北大学の活発な課外活動に参加できたお蔭で、僕は５年間もずっとトライアスロンを続けることができ、その全国大会や全世界大会に出場することもできました。

東北大学大学院国際文化研究科での５年間、貴重な経験や勉強ができたからこそ今日の自分がいるのだと思います。このように顧みると、心が感謝の気持ちでいっぱいになります。東北大学大学院を修了したことを本当に誇りに思い、嬉しい限りです。本年度の４月から、僕は東北大学の教育・学生支援部で講師になりました。引き続き、大好きな東北大学・仙台にいられて、本当に大変嬉しく思っております。これからも東北大学の名をけがすことなく、教育・研究に精一杯に頑張り続けたいと思いますので、これからも宜しくお願い致します。

研究紹介

●マヤ語の三角測量

国際文化言語論専攻
多元文化論講座　准教授
吉田　栄人

マヤ語を初めて学んだのは、スペイン語の勉強をするためにメキシコに初めて留学した1981年。それから30年の歳月を経て、Guia gramatical de la lengua maya yucateca para hispanohablantesというマヤ語の文法解説書をスペイン語話者向けにスペイン語で書いた。ただ、その間ずっとマヤ語の研究をしてきたわけではない。むしろ、様々な回り道をしてきたが故に書けたものだろう。また、近年ほどのマヤ語の「復興」に対する機運の高まりがなければ、おそらくこのような本を書くことなど思いつきもしなかっただろう。

ユカタン・マヤ語の文法解説書は植民地時代の16世紀から宣教師たちの手によっていくつも作成されてきた。また、現代の言語学者による研究も数多く、文法解説書を新たに作成することは一見不要であるかのように思われる。しかし、植民地時代に作成された文法解説書はスペイン語やラテン語の文法をモデルとしたものであったため、マヤ語の文法的特徴を正確には捉えきれていない。また、現代の言語学者による研究はトピック限定であり、しかもその多くは学術研究のリンガ・フランカである英語で書かれているため、言語学の専門用語はもとより英語を十分に使いこなせない教師が多い教育現場には、そうした最新の言語学的な知見はなかなか届かない。マヤ語を教えたり、学ぼうとするスペイン語話者（マヤ語が母語である者も含む）が手軽に利用でき、しかも文法規則を体系的に説明した解説書は実は皆無に等しいのである。

通常であれば、スペイン語で書かれたユカタン・マヤ語の文法解説書のタイトルにわざわざスペイン語話者向けという説明を付ける必要はない。「スペイン語話者向け」というタイトルのフレーズは実は、スペイン語の文法的パラダイムをマヤ語文法に持ち込むことに対する一つの問題提起として敢えて付けたものである。マヤ語をメタレベルから捉えるためには、スペイン語（さらに言えば印欧語）の文法モデルそのものを相対化しなければならない。そうでなければ、マヤ語の文法はスペイン語をメタ言語としたスペイン語文法との対応表で終わってしまう。これまでの文法解説書のほとんどは学習者（その多くはスペイン語話者）への配慮から、そのような仕掛けで構成されてきた。だが、そうした解説は入門レベルでは役に立っても、中級レベル以降になると途端に役に立たなくなる。説明されないことが増えていくからである。同書では、可能な限りマヤ語の文法をマヤ語の論理で理解し、またそれはスペイン語の文法ではどのように対応するのかを説明しようとした。それは、視点を変えれば、マヤ語の文法に関する伝統的な理解を組み替えることにも繋がる。

そういった試みはおそらく言語学者であれば、明言しないまでも、誰しもが考えることであろう。だが、いずれも成功しているとは必ずしも言えない。それはほとんどの人がスペイン語あるいは印欧語の文法的枠組みでマヤ語を見てきたことと無関係ではないはずだ。明言こそしていないが、同書の文法モデル、特に動詞の活用に関する説明は、日本語をモデルとしている。言語学者の多くは忘れがちだが、ある言語のネイティブであるが故に持ちうる文法理解というものが存在する。日本語話者であれば、スペイン語話者とは違った視点からマヤ語の文法を理解できるはずである。通常ネイティブの言語学者はメタ言語としての言語学の文法枠組みを整備するために、自らの言語に関する知識を使おうとする。マヤ語ネイティブの言語学者であれば、マヤ語固有の文法規則をそうした枠組みの整備に貢献できるはずである。だが、現実にはそうはなっていない。ネイティブ言語学者はそのほとんどが印欧語をモデルとした「普遍的な」文法概念をまず学習し、それを使って自らの言語を見るようになってしまうからである。「普遍的な」文法概念の下で展開する現代の言語学的な研究においては、ネイティブ言語学者が自らの言語を自らの言語の論理から理解することほど困難なことはないのではなかろうか。ある言語の論理を理解・説明するためには、むしろその言語にも、また言語学がメタ言語として用いる印欧語にも属さない第三の言語からの視点を導入すること、すなわち三角測量が有効なのではなかろうか。同書はそうした言語の三角測量の下に作成したものである。日本語話者特有の文法理解がマヤ語文法の解釈においてどれだけ有用性・有効性を持ち得るのかは、これからの同書の使用によって明らかとなるだろう。その意味で同書の発行は単なる研究成果の公表であるのではなく、一つの実験の始まりでもある。

なお、同書は科学研究費補助金による研究「ユカタン・マヤ語復興活動における言語学的知見の実践と応用」の一環として、ユカタン州立オリエンテ大学のミゲル・オスカル・チャン教員及びキンタナ・ロー州立キンタナ・ロー大学のイラリオ・チ・カヌル研究員の協力を得て作成したものである。インターネット上(http://tohoku.academia.edu/ShigetoYoshida) にPDF版を公開しているが、アクセス数は初版と改訂版を合わせて公開から延べ3,600回（2014年10月9日現在）を超えている。

写真　古代マヤ文字の碑文が記された石碑
（メキシコ国立人類学博物館所蔵）

●たかが古文書、されど・・・

国際地域文化論専攻
イスラム圏研究講座　准教授
大河原　知樹

専門は社会史で、近代移行期のシリアにおける都市社会の変容プロセス解明をめざして研究を行っている。シリアは、日本史や西洋史に比べると数は劣るものの、豊富な叙述史料と16世紀以降のオスマン帝国支配下で作成された数千冊に及ぶ法廷記録台帳や証書類などがあり、それらを読み解くことで、驚くほど鮮明に当時の社会像を浮かび上がらせることが可能な地域である。

【写真1】17世紀に作成された法廷証書。ダマスカス歴史文書館所蔵。（ダマスカス／シリア）

私の場合は、いくつかの幸運も重なった。1993年からの2年間のシリア留学の際、懇意にしていた知人が所蔵していた、オスマン時代末期のダマスカスの一街区の住民構成や家族の様子が克明に記録された行政資料を閲覧することができた。同じ頃に訪問したトルコの首相府オスマン文書局で、19世紀半ばのダマスカスで課税されたすべての不動産が記録された分厚い台帳を発見した（複写が許されなかったので数か月かけて全頁を筆写した）。1997年に古文書専門家として過ごした二度目の2年間のシリア滞在では、司法省から移管されたばかりの20世紀最初の30年間の結婚契約台帳群と、さらに書庫で自分が偶然発見した一冊の死亡記録台帳を調べた。こうした運命の「出会い」にも恵まれ、19世紀半ばからオスマン帝国滅亡までのダマスカスの家族史をテーマとする博士論文を書きあげることができた。

東北大学に職を得てからは、法廷システムや法文化への関心が高まり、大学研究者や弁護士たちとともにシャリーア（イスラーム法）の研究会を立ち上げた。19世紀半ばにシャリーアを基礎に編纂されたオスマン民法典（メジェッレ）を総合的に研究することを目的として、2008年以来ほぼ月一回のペースで研究会を開催し、現在までに全体の三分の一にあたる611条まで訳し終えた。思い返せば、私の研究は史資料や人々との幸運な「出会い」に支えられながら進んできたのだと実感する。

【写真2】ダマスカス歴史文書館の文書修復作業。JICA事業の一環として実施された（ダマスカス／シリア）

2013年秋から2014年春までの半年間、研究休暇を許されたので、新たな史資料や人々との「出会い」を期待しつつ、トルコのイスタンブルに滞在した。これまでの短期滞在では調査が叶わなかった図書館や公文書館に所蔵されているオスマン帝国時代の写本や法定記録台帳、書籍を閲覧、複写したほか、近年盛んに設立されている研究財団や大学のセミナー、研究会に参加するなどして、最新の研究動向にふれ、研究者たちと学術交流を重ねることができた。現在は収集した史資料を整理している段階であるが、8月にアンカラで開催された世界中東学会国際会議で発表するなど、成果の公開も徐々に行っている。

【写真3】首相府オスマン文書局は帝国時代の旧大宰相府内にあった。現在は別の場所に移転している（イスタンブル／トルコ）

目下の気がかりは、2011年2月、最後（になるとは思わなかったが）のシリア訪問からの帰国直後に勃発した内戦の行方である。3月に東日本大震災が発生した際は、まだシリアの友人たちから励ましのメールを頂く状態だったが、その後、情勢は徐々に悪化してゆき、今では細々とフェイスブックでやり取りをしている有様である。早くシリアが平和になり、懇意の友人たちや諸々の史資料との再会を果たす日々の到来を祈らずにはいられない。

●浜大樹２遺跡の発掘調査

国際文化交流論専攻
科学技術交流論講座　教授
深澤　百合子

南に太平洋を望み、西に日高山脈がはしる、北海道十勝大樹町晩成地区、ここは明治時代に依田勉三が晩成社を結成し北海道開拓に入った近代十勝開祖の地と言われている。

この地域にある太平洋岸に沿ってホロカヤントや湧洞湖などの湖沼周囲一帯に竪穴住居群が点在している。今からおよそ1000年前、擦文時代の人々が居住していた家々の跡である。大樹晩成プロジェクトとして現在、発掘調査が進行しているのはそのうちの一軒、浜大樹２遺跡１号住居址（写真１）である。

写真１

この発掘調査の重要な研究意味はいくつか示すことができるが、現在トップテーマとして解明していることは擦文人の食生活である。この地の擦文人が雑穀栽培をおこなっていたという仮説を検証することで、特にヒエ、アワ、オオムギなどの雑穀栽培の証拠を検出し検証したいと考えている。状況証拠を押さえることはどの調査においても当然のことであるが、決定打となる証拠をあげることができれば、この地の擦文時代の文化的背景の核心に迫ることができる。つまり、解明したい直面の課題はひとつの伏線であり、これでもか、これでもか、というようにいくつもの証拠をあげ核心に迫っていくのが考古学の研究である。したがって、発掘調査は証拠となる基礎データの検証作業をおこなうことである（写真２）。

写真２

では、どうやって検証作業をおこなうのか。栽培種子が含まれている可能性のある土層を徹底的に調べることである。土を採取し丁寧に洗い、フロテーション工程の選別の後、顕微鏡の下で捜すことで見つけることが可能となる。大胆な発掘作業から顕微鏡を使う繊細な作業を経ることで検証をおこなう。浜大樹２遺跡１号住居は焼失家屋と思われ住居内に炭化した材や木炭物片が多く散見し、かまど跡の壁面は真っ赤に焼けた焼土壁がある。この住居には炭化した種子があるだろう。種子は炭化しないと残らないのだ。住居内にかまど跡が検出できたことは煮炊きした食材や調理の方法が推測可能となるので重要な状況証拠である。床面から柱穴跡も検出でき、かまど前面の床面直上の層（写真３）はデータ採取にとって宝の山であり重要となる（写真４）。

写真３

写真４

このようにして分析するべき基礎データを採取して発掘調査は終わるのであるが、学術調査には現状復帰作業として埋戻しが伴い、発掘したところを養生し埋め戻す必要がある。開けたら閉めるが原則である。今年の成果を踏まえ来年の期待につながる。

この発掘調査は東北大学学生（講義受講者、学友会考古科学技術研究会員）と一緒におこなっている。考古学は心身ともに疲労の激しい学問と言われ、アカデミックの３K（きつい、きびしい、きたない）とも言われている。考古学に興味があってもタフでないと炎天下、時には雨天の調査にはついてこられない。学生は発掘調査事前勉強会など座学を含め、実技トレーニングを３か月間猛特訓で鍛え上げられ、研究現場に立った。彼らは想像力豊かな強者ぞろいである（写真５、写真６）。今後、室内作業工程にはいり、土壌サンプルのフロテーション選別をおこない炭化栽培種子の検出をおこなう。検出できると信じている。

写真５

写真６

平成 26 年度科学研究費補助金採択一覧

10 月 14 日現在

氏　名	研究種目名	研究課題名	備考
山下　博司	基盤研究(B)海外学術	ディアスポラにおける民族宗教の変質と再編－ヒンドゥー教と道教の動態的側面を中心に	
ブシュバラールディニル	基盤研究(B)海外学術	モンゴル産フライアッシュの有効利用に関する総合的調査	
岡田　　毅	基盤研究(B)一般	タブレット端末を用いたブレンディッドe-ラーニングによる外国語教育プログラムの開発	新規
山下　博司	基盤研究(C)一般	中世タミル語の聖徒列伝『ペリヤ・プラーナム』の批判的翻訳と文学的・思想史的研究	
鈴木美津子	基盤研究(C)一般	ロマン主義時代における国民小説の誕生とその変容	名誉教授
坂巻　康司	基盤研究(C)一般	近代日本におけるフランス象徴主義受容に関する総合的研究	
勝山　　稔	基盤研究(C)一般	戦前期において支那愛好者が果たした文化受容活動の実証的研究－－井上紅梅を中心に	
市川真理子	基盤研究(C)一般	初期近代イギリス劇における視覚的表現手法の演劇空間論的観点からの研究	
佐藤　研一	基盤研究(C)一般	十八世紀ヨーロッパの描く異邦人像－－ドイツとイギリスの通俗劇を中心にして	
藤田　　緑	基盤研究(C)一般	トポスとしてのアビシニア－－近代日欧におけるアフリカ認識の変転	
鈴木　道男	基盤研究(C)一般	新世代ディアスポラの系譜書き換え－告発の文学の求心性とダブルバインド	
Narrog Heiko	基盤研究(C)一般	文法化と意味図構築の基礎的研究	
杉浦　謙介	基盤研究(C)一般	移動型多機能端末を活用した外国語教育－実践のための総合的研究－	
小原　豊志	基盤研究(C)一般	人種のポリティクス－白人性の解体分析をつうじた南北戦争・再建期像の再構築－	
深澤百合子	基盤研究(C)一般	禁農モデルを検証しアイヌ農耕文化の実態を解明する	
青木　俊明	基盤研究(C)一般	社会基盤整備を活用した協調社会の促進とコミュニティ再生	
劉　　庭秀	基盤研究(C)一般	日中韓における都市鉱山政策の妥当性評価－自動車電装品を事例に－	
井川　眞砂	基盤研究(C)一般	晩年のマーク・トウェイン―新版『自伝』（２０１０）に見る著者の歴史意識―	名誉教授
藤田　恭子	基盤研究(C)一般	ルーマニア・ドイツ語文学にみる二つの「過去の克服」―ナチズムと社会主義独裁―	
黒田　　卓	基盤研究(C)一般	イランにおける「近代性」の意味変容と「国民」の創生	
野村　啓介	基盤研究(C)一般	フランス第二帝制下の地域権力に関する比較地域史研究	
石幡　直樹	基盤研究(C)一般	メアリ・ウルストンクラフトに見られるピクチャレスク	新規
小野　尚之	基盤研究(C)一般	生成語彙意味論に基づく名詞の事象性の日英比較研究	新規
佐藤　雪野	基盤研究(C)一般	ナショナリズム・経済的利害・民族共生―戦間期チェコスロヴァキアの事例に学ぶ―	新規
佐野　正人	挑戦的萌芽研究	日韓歴史認識問題の期限と展開―戦後初期と1990年代を中心に―	新規
柳　　朱燕	若手研究(B)	韓国語テンス・アスペクトの第一言語習得過程及び習得データのコーパス構築	
高橋　　慶	若手研究(A)	文理解中の修正機能メカニズムの解明	

最近の著作から

山下 博司 教授

『アジアのハリウッド
―グローバリゼーションとインド映画―』
（東京堂出版、2010年）
xi+345頁、山下博司・岡光信子共著

インドは制作本数世界一を誇る映画大国である。インドの経済成長に伴い、映画産業のグローバル化やコンテンツの変容が進んでいる。本書は、芸術映画、中間映画、娯楽映画にわたる映画の制作に携わる人材（プロデューサ、監督、俳優、撮影技師、脚本家）、批評家、映画教育関係者、オーディエンスなど、百名以上に面接取材をおこない、統計分析や作品論も交えて、グローバル化時代のインド映画産業の様態や異文化理解における映画の役割を論じている。

インド映画への興味は、マドラス（現チェンナイ）での６年間の留学時代に遡る。タミル古典文献学を専攻したが、日常生活で口語タミル語を駆使する必要もあり、現代語の上達のため上映館に足繁く通った。古典語と現代語は天と地の差があり、映画は口語に慣れる上で格好の材料である。帰国後も、日本で上映されるタミル映画の字幕作りに携わるなどして、映画への関心は深まっていった。外国映画の興行史に残る大ヒットを記録した『ムトゥ 踊るマハラジャ』やマニラトナム監督の名作『ボンベイ』の字幕作成に関わり得たことは、いい思い出であり、またそれらを通じて多くの映画人と巡り会えたことも本書の執筆へと繋がっていった。その意味で本書は映画関係の数多くの人々との交誼の結晶でもある。

これとは別に、10～12世紀前後の南インド・ドラヴィダ系諸言語による文学活動を記述した共著*A Concise History of South India*が2014年９月に「オックスフォード大学出版局」から、さらに古代インドの風土的自然と文化的・思想的営為の相関を論じた単著『古代インドの思想－自然・文明・宗教』が同年11月に「ちくま新書」から上梓された。ご関心ある向きには是非ご一読願いたい。

小野 尚之 教授

生成文法が世に出てから50年あまりの年月が経ちます。本書は、この間に生成文法が辿ってきた軌跡を執筆者たちの視点から再構成することによって、生成文法のエッセンスを読者に伝えることを目的としています。60年代や70年代に研究者たちが盛んに議論した事柄は、若い研究者や学生諸君にはすでに遠い過去の出来事になっていますが、執筆者たちは、現在の理論に至る歴史的変遷を縦軸に、そして現在進行中の理論展開を横軸に置いて、読者に全体的な俯瞰図を与えたいと考えました。「温故知新」という言葉があるように、人が初めて出会う事柄がいつも新しいとは限りません。そういった意味で、現在の問題につながる過去の議論を知ることが、まさに新しい問題を理解する上で不可欠であると考えます。

本書は、生成文法の基盤を前半の５章で説明し、その展開を後半の７章で扱っています。前半では、生成文法の目的、句構造、レキシコン、移動、意味などを取り上げ、議論の変遷を踏まえた解説を加えています。後半では、副詞、束縛とコントロール、A移動、関係節、削除現象、焦点、翻訳と生成文法などのテーマで議論を深めています。これから、生成文法を勉強する人、すでに概略は知っているがさらに深く全体的に理解したい人にぜひお勧めしたい本です。

『生成文法の軌跡と展望』
小野尚之・近藤真・藏藤健雄・
松岡和美・藤本幸治
iii+262 pp. 金星堂 2014年２月

INFORMATION

国際文化基礎講座（公開講座）

第20回公開講座は、「アジア経済発展の功罪」を共通テーマとして、平成25年11月16日、23日、30日の三日間に渡って開催されました。世界人口の60％を抱え、多様な歴史・文化・民族・宗教・政治に彩られるアジア地域は、戦後、急速な経済成長を成し遂げ、経済的にも重要な位置を占めるようになりました。世界第二位の経済大国となった中国，第三位の日本を擁するアジアは世界の大経済圏にのし上がったものの、成長の陰で犠牲にしてきたものはなかったでしょうか。第20回の公開講座では、文化・環境・資源という観点からアジア経済発展の功罪を論じながら、次世代に残すべきアジアとは何かを考察しました。初回は木谷忍先生が「地域文化の保全と地域経済の発展の狭間で－中国河北省蔚県の伝統工芸品「剪紙」に対する若者の意識－」というテーマで、第二回目は横川和男先生が「為替相場の決定とそれをめぐる政策の功罪－日本の例－」というテーマで、第三回目はプシュパラール・ディニル先生が「文化と自然の制約のなかで「よりよく」暮らそう！」というテーマで、それぞれ開講されました。木谷先生は地域の経済発展と伝統を守ることとの兼ね合いを中国河北省にて行われた剪紙職人や経営者の高校生によるＲＰＧ（ロールプレイゲーミング）を中心にお話いただきました。横川先生は、為替相場が市場でどのように決定され、政策によりいかに左右されるかについて概説し、日本を例として為替相場をめぐる政策による経済生活への直接間接の影響や功罪について考察しました。プシュパラール先生は文化・社会という観点からアジア経済発展の功と罪を中心に次世代に残すべきアジアはなにかに焦点をあて講義を進めました。最終日に設けられたラウンドテーブルでは、受講生が各テーブルを移動しながら、講師の先生方と自由闊達な討議を重ねる姿が見受けられました。天候にも恵まれ、多数の受講生を迎えて、公開講座は無事閉幕しました。

第21回 東北大学国際文化学会の大会が開催されました

去る平成26年6月28日（土）、東北大学川内北キャンパス マルチメディア棟6階にて、東北大学国際文化学会の第21回大会および総会が開催されました。当日は、あいにくの雨模様のなか、8名の研究者が日々の研究成果について発表いたしました。昨年度より、発表時間と質疑の時間を長く設けておりますが（発表15分、質疑10分）、多くの発表で質疑の時間が不足となり、盛況な発表会となりました。また、今回は本学会の後援行事としてJames McMullen先生（Oxford 大学名誉教授）による特別講演「江戸時代の儒教：熊本の藩校時習館における釋奠(せきてん)の問題」が開催され、文学研究科の教員や学生をはじめ、多くの聴講者で会場が埋まりました。また、総会では、①次回大会の休止、②学会誌の電子化と会員への冊子体の配付停止（第22号より）、③会費の減額、といった重要な議案が承認されました。なお、学会誌は今後も継続して発行していく予定です。

現在、本学会は大きな変革期を迎えております。引き続き、多くの皆様からのご意見・ご要望をお待ちしております。

オープンキャンパス2014報告

7月30日、31日の両日、今年もオープンキャンパスが開催されました。今年は耐震改修のため研究科の建物が使えず、講義棟での開催となりましたが、そのことが逆に良かったのか、参加者数がのべ1159人と、昨年の約2倍に増えました。これは研究科史上もっとも多い人数でした。今年も修士論文の発表会や研究紹介、講座の情報提供、そして国際交流企画など盛り沢山の内容でした。一時激しい雷雨に見舞われるという今夏らしい出来事がありましたが、事故もなく参加者には無事に帰ってもらいました。

研究科棟の劇的ビフォーアフター

平成25年10月から始まった国際文化研究棟（東棟）の耐震改修工事が平成26年8月に終了しました。当初の予定より4ヶ月工事期間が延びましたが、この号が出る頃には引っ越しもすべて終了し、国際文化研究棟に居室のある人は新しくなった建物で2学期をスタートさせているでしょう。耐震改修でどんなところが変わったか少し紹介してみたいと思います。

まず、建物の外観ですが、建物の南面（道路側）には新たに補強のための柱が入り、壁の色も明るくなったので、建物全体の印象が変わりました。加えて目に付くのは、なだらかな傾斜で玄関につながる車椅子用のスロープでしょう。これは車椅子だけでなく、大きな荷物の出し入れにも役立つと思います。建物の北面（キャンパス側）には、やや無骨なブレース（補強材）が入り、建物の強度をしっかり保持してくれています。これが今回の改修でもっとも目に付く箇所でしょうか。さらに、目には見えませんが、建物内部の構造壁も増設して強度を上げています。

次に、建物内部ですが、壁、天井、床の色がすべて明るくなりました。さらに、ドア色をライムグリーンに統一したので、これまでと比べて印象がかなり明るくなりました。そのため、玄関も広く感じられることと思います。このライムグリーンは、研究科のロゴに使われている色に対応したもので、研究科のイメージに統一感を持たせる意味を持っています。また、以前廊下の壁面に露出していた配管をすべて壁内に収めたので、廊下がすっきりしました。さらに設備として以前と違うところは、エレベーターを大型化して車椅子等にも対応したこと、すべてのフロアに男女用トイレを設置したこと、水道とガスをフロア毎の給湯室に一元化したことなどです。

冒頭の記事でも紹介されたように、国際文化研究科は平成27年度から研究教育組織を改編することになりました。今回の改修工事はそれに合わせたわけではありませんが、建物も新しくなったことで、気持ちも新たに一歩を踏み出せるのではないでしょうか。

入学を希望される皆様へ

次の入学試験（春季入試）は、
平成27年2月12日（木）、13日（金）に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

詳しい入試情報については、本研究科ホームページ
http://www.intcul.tohoku.ac.jp/admission/information.html をご覧ください。
お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先
東北大学国際文化研究科教務係
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583
E-mail: int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp

編集後記

国際文化研究科は、昨年度創立20周年の記念事業を執り行い、今年度は全面的な耐震改修工事により研究科棟を一新し、さらに来年度からは変化する現代国際社会に対応した研究教育を推進するため、従来の「3専攻16講座」の体制から「1専攻3系8講座」の体制に組織を改編いたします。この節目に際し、当広報誌にも今号より『GLOBE』という名称を与え、今号は改編後の新組織の概要紹介を中心に内容を構成しています。新組織についての情報や新しい雰囲気が読者の皆様に伝わればと思います。末尾になりましたが新組織の紹介・研究の一端の紹介・修了生メッセージ等の原稿をお寄せ下さった皆様に深く感謝申し上げます。

（編集担当）

東北大学大学院 国際文化研究科 GLOBE No.27
○東北大学大学院 国際文化研究科 広報 No.27 ／平成26年10月
○編集／国際文化研究科 広報委員会　〒980-8576 仙台市青葉区川内41　TEL:022-795-7556